

令和五年度

「家庭の日」の 作文作品集

……毎月第3日曜日は「家庭の日」……

「家庭の日」をきっかけに、家族相互の愛情と思いやりの心に満ちた明るい家庭を築くよう努めましょう。



もくじ



優秀賞(六点)

わが家流元氣の出し方

北小学校 三年

鈴木 聡一郎
すずき そういちろう

2

家族と楽しい引っこし

丸子北小学校 五年

西嶋 祐希
にしじま ゆうき

3

幻のおじいちゃん

塩田西小学校 六年

永井 歩実
ながい あゆみ

4

言葉の選択

第六中学校 一年

倉澤 舞莉
くらさわ まり

5

祖父への想い

塩田中学校 二年

木村 明日香
きむら あすか

6

家族の一ピース

第五中学校 三年

田中 詩季
たなか しき

7

優良賞受賞者一覧

8

わが家流元気の出し方

北小学校 三年 鈴木 聡一郎
ササキ スズキ ソウいちろう

「鈴木家、集合！」

これは、家族で円じんを組む時の始まりの合図です。家族で円じんを組むなんて、ふしぎだと思います。なぜ組むのかというと、わが家流の元気の出し方だからです。

ぼくは三年前に、かな川県から引っこしてきました。引っこしてくる前は保育園が大好きで友だちと楽しく遊んでいましたが、上田に来たら友だちがいなくていつもようち園に行く前に泣いていました。そこでお母さんが作り始めたのが鈴木家、集合の円じんです。それを始めるとふしぎに元気がでてがんばろうという前向きな気もちになって、すこしずつ泣くこともなくなり友だちがふえていきました。今では上田での生活が大好きです。

円じんを組むのはそれだけではありません。

「絶対勝つぞー、ファイト。」

「新学期がんばるぞー、オー。」

など大切な時にお父さんやお母さんがおうえんしてくれます。

家族で円じんを組むときのお話をしようかします。

一年生の初めての運動会はなんと足をけがしてしまい、ときよう走に出ることができませんでした。その日もお母さんはいつものように、

「鈴木家、集合！」

「走れないかわりに、おうえん団長しっかりね。」

と円じんを組んでくれました。走れなくてざんねんでしたが、大きな声

をだして人一倍クラスのみんをおうえんしました。

三年生になった初めてのクラスがえの日の朝も、仲のいい友だちと同じクラスになれるか不安で、とてもきんちようしていました。

「鈴木家、集合！」

「きつと大丈夫！」

と円じんを組んだら、不安な気持ちがスーっとへりました。

こうやって家族におうえんしてもらうことで、おうえんしてもらうれしさがわかりました。

そして今度はぼくが、

「鈴木家、集合！」

と言ってお父さんやお母さんの大事な仕事の時には元気をつけてあげようと思いました。

(寸評)

県外から引っ越してきて、不安な思いをしていた作者を応援しようとお母さんがはじめた「円陣」。大切な時にお父さんお母さんが応援してくれたお陰で不安な気持ちが減って、嬉しさが分かった作者。今度は自ら両親を応援する円陣の声掛けをするということでも微笑ましい作品です。

家族と楽しい引っ越し

丸子北小学校 五年 西嶋 祐希
にしじま ゆうき

ぼくは八月に引っ越し事になりました。そのために家具などを見てきました。ソファーなどを見てきました。家族の気持ち好きな色好きな種類などがわかりました。

ソファーはみんな選びました。それでこんなふうになりました。この色の大きいソファーになりました。それでえらぶ時に色々できごとがありました。たとえば弟がその場にいた子供と友だちになっていました。そういう所がすごいと思いました。ソファーの位置はお父さんのアイデアで決められました。家具屋さんも

「いいね。」

と言っていました。お父さんはセンスがあると思いました。ソファーを選ぶ所でご飯を食べる所のライトを選びました。お母さんがリクエストを出しました。

「いいね。」

と、なって決められました。それでつけたところを見にいったらめっちゃ合っていました。思わず

「いいね。」

と叫んでしまうぐらい合っていました。お母さんもセンスがいいと思いました。みんなセンスがあつてすごいと思いました。

このあと引きわたしがあつて、住めるようにするための物を家から持ってくる作業で、力があるお父さんとおれで車からおろし家の中に持って行くときに、お母さんが手伝ってくれました。そのあいだは弟が、赤

ちゃんをみてくれました。二人の手伝いがあつたおかげですぐに終わりました。そこで家族の絆がわかりました。これからそういう手伝いなどで絆を深めていきたいです。

(寸評)

新しくできた家への引っ越しを通して、家族一人一人が持っているセ
ンスに気づき、それを素晴らしいものと作者は感じ、評価しています。
重い家具を運んだり、小さな赤ちゃんの世話をしたり、家族が力を合わ
せて引っ越しをしています。家族みんなで成し遂げた引っ越しを楽しく
書いていて、愉快的気持ちにさせてくれます。

幻のおじいちゃん

塩田西小学校 六年 永井 歩実ながい あゆみ

私のおじいちゃんは、私が生まれるずっと前に、亡くなってしまいました。なので、私は、おじいちゃんに会ったことが、一回もありません。だけど、よく、お母さんと、私の家に一緒に住んでいるおばあちゃんが、おじいちゃんのことや、おじいちゃんとの思い出の話をしてくれます。例えば、おじいちゃんは、やさしくて、おもしろくて、努力家だったと、前に、お母さんが話をしてくれました。

おじいちゃんは、読書をする事、プロ野球を見ること、そして、食べる事が、とても好きだったそうです。そして、お母さんに、おじいちゃんの仕事について、聞いてみました。お母さんの話によると、おじいちゃんはハムの会社で働いていて、よくお母さんが、小学生のころに、東京や、静岡、海外で仕事をしていたと、お母さんは、とてもなつかしように話をしてくれました。だけど、おじいちゃんは、お母さんが、高校生ぐらいのときに、病気で、亡くなってしまいました。お母さんからそのことを聞いた私は、もしも私が、高校生ぐらいのときに、私のお父さんがとつぜん亡くなってしまったらどうしようと、考えてしまいました。きっと、私が、考えているよりも、お母さんや、おばあちゃんは、おじいちゃんが亡くなってしまったときとてもショックで、とても悲しかったんだらなと思います。そして、私は、よく学校などで、友達たちが、おじいちゃんのことを話しているときに、おじいちゃんがいるって、どんな感じなんだろうと考えるんです。きっと、おじいちゃんが、生きていてくれたら、私は、おじいちゃんと、とても仲が

良かったと思います。私は、おじいちゃんのお墓に行ったときは、いつも心の中で、空の上にいるおじいちゃんに話をしています。例えば、学校のこと、私のこと、家族のことなどの話をしています。

おじいちゃんは、もし生きていたら、今年の八月三日が誕生日だったので、七十二歳になります。私は、おじいちゃんに、もっともっと、長生きしてほしいかったです。きっと、お母さんもおばあちゃんもそう思っていると思います。

私は、一回でもいいから、亡くなってしまったおじいちゃんに会って、話をしてみたいです。私にとってのおじいちゃんは、話を聞いたことと、写真を見たことしかないので、幻だけど、これから、おじいちゃんのことを覚えていて、将来、子供ができたら、その子供に、あなたのひいおじいちゃんはこの人だったんだよと、話をしたいです。

(寸評)

自分が生まれる前に亡くなってしまったおじいちゃんの人柄や趣味を家族から聴き、おじいちゃんに思いを寄せ、世代を超えた家族のつながりを感じさせてくれる作品です。「お墓では空の上にいるおじいちゃんに話しかけている」「自分の子どもにもおじいちゃんの事を話したい」など、作者のおじいちゃんへの気持ちが伝わってきて感動的です。

言葉の選択

第六中学校 一年 倉澤 舞莉くらさわ まり

「アムソーリー。」
この一言が決め手だった。

私と兄は仲良しだった。小学三年生の時、兄が修学旅行に行くのが悲しく涙目になりながら書いた作文で賞をとれたくらいだ。二人でゲームもたくさんしたし、イタズラもたくさんした。ケンカしてしまう事もあったけれど、謝らなくても自然に仲直りできた。しかし、今回は違った。

ある日、二人で兄の作ったガンダムで遊んでいた時、私が落として壊してしまった。普通なら外れても直せるところが外れるが今回は外れるべきところではないところが飛び散った。私は、「やっちゃった」と思い兄を見た。兄は、

「直すから一階にあるボンドを持ってきて。」
と言った。私は、夜で暗くて怖かったので

「一緒に来てよ。」

と言いつ返した。そこから言い争っていたら兄は怒って部屋から出て行ってしまった。その日は話す事なく終わり次の日、なんとなく話しかけずらくて黙っていた。そのまま一日が過ぎ、気づいたら何日かたっていた。それでも私は今まで通りそのうち仲直り出来るだろうと思っていた。

翌日の夜、見かねた母が間に入って私が謝る機会をくれた。でもいざ謝るとなると緊張して言葉が出ない。ここで言ってしまった。

「アムソーリー。」

言っただけ後悔した。あ、これ許してもらえないやつだ。察した。母も呆れている。よく考えたら私もこんな事されて許すはずがない。大切にしてた物を壊され言い返され、謝罪の言葉が「アムソーリー」なのだ。誰でも怒る。しかも、言い方も悪かった。目を見開いてしゃくれた反省する気のない言い方だった。まだ小学生だった私は、この一言で

どれだけ相手が不愉快になるか知らなかった。今になって後悔しても遅い。あの後すぐに言い直せば良かったものの、私にはそれが出来なかった。

それから約一年半の時があった。それでも私は勇気を出せずにいる。

今になって気づく私の一言で周りに気を使わせてしまっているし、兄と作れる思い出も作れないし話し相手にもなれない。家族だからとか関係なく言葉遣いに気をつけたと思った。長い間、話せていないけれど私にとつて兄は世界に一人しかいない兄妹でかけがえのない存在なのは変わりない。ケンカしても兄は兄だ。中学の修学旅行でお土産を買ってきてくれたし、兄が買ったマンガも読ませてくれた。でも、何より私がいやな言い方をしても口を出したり、手を出してこなかった事に優しさを感じた。

いつまでももうじうじしていないで、勇気を出して話しかけ、また一緒にゲームしたり、マンガを読んだ感想など語り合う。これが今の私が持つ、絶対に叶えたい大きな夢だ。

(寸評)

兄とガンダムで遊んでいた時舞莉さんは、兄が大切にしていたガンダムを落とす壊してしまいます。母を介して謝った言葉が思春期の恥ずかしさか「アムソーリー」でした。

これをきっかけに、ここ一年半の間兄とのわだかまりが続いてしまっている様子を、自分の心を見つめ丁寧に書いています。この体験から「家族だからとか関係なく言葉遣いに気をつけたい」と学んだ筆者は、近いうちきつと勇気を出し、大好きな兄と仲直りができることでしょう。作文の構成力が素晴らしいです。

祖父への想い

塩田中学校 二年 木村 きむら 明日香 あすか

「ミンミンミンミンミンミン。」と暑苦しくセミが泣いているなか、祖父の十七回忌が始まった。

私は、祖父がどのような人かわからなかった。なぜなら私が生まれてくる二年前に祖父は他界してしまっただからだ。そこで私は、法事が終わった後、母に祖父はどのような人なのか話を聞いてみた。

祖父は、飲食店を経営していた。祖父は、お店の準備で朝早くから起きて、昼は、お店の営業、夜は片付けをして一日よく働く祖父だったらしい。そして、ユーモアがあつて人を笑わすことが得意だったようだ。

そんな祖父が脳出血で突然亡くなったので母は、悲しい思いをした話を聞いた。そして私は、この話を聞いて祖父の存在は家族にとって、とても頼もしい大きなものだったと感じた。私は、法事が始まると同時に祖父の事を考えていた。そして、お坊さんが香炉を回してください、二人のおじから祖母、祖母から父と母に回り最後に私が焼香をした。私は、あまり焼香をしたことが無かったので、私の前に焼香していた家族の様子をみて焼香をした。普段の生活で、亡くなった人の事を思い出して話すことは、あまりないが、焼香をしている時、祖父はどんな人だったのかを考え、後で両親に聞こうと思った。

祖母の家でお経をあげてもらった後、全員でお墓に行き、お墓の掃除をして、お坊さんにお墓の前でお経をあげてもらいながら私達は、一人ずつ線香をあげて手をあわせていった。夏の暑い日差しが刺さるなか、

線香のけむりがそよ風と一緒に流れ、私は、この空間に家族全員が集まった気がした。

こうして祖父の十七回忌が終わった。

今、思えばもっと祖父の事をたくさん聞いておけば良かったなと思つた。そして、家族全員が集まり、祖父の事を一緒に思い出す大切な時間を過ごせた。

(寸評)

作者が生まれる前に他界し会ったことのない祖父の十七回忌法要の席で、母からの話や法要の様子から亡き祖父の姿を思いめぐらせています。そして、法要の持つ意味やそこに集まった人々の個人への想いを感じ取っていることが伝わってきます。

気負いのない詩的な文章でその場面が目には浮かびました。

家族の一ピース

第五中学校 三年 田中 詩季たなか しき

私の家族は、優しくて音楽が得意なお母さんと、おもしろくてチョコが大好きなお父さんと、私と気が合わなく、恐竜好きの妹、そしてめんどくさがり屋の受験生という四人で構成されています。一人一人の性格は全く違うけれど、お互いのことを考えて話したり行動できたりするのは、私の家族の一番良いところだと思います。

平日は、みんなバラバラの時間に家を出発して、バラバラの時間に帰ってきます。家にいる間、ご飯以外はみんな誰かと生活スタイルが重なることはありません。ですが、家を出発してからみんなが向かう先は、学校という場です。私の両親は教師です。家での生活スタイルが重なることはないですが、日中はみんな学校という共通の場にいるので、家でもお互いのことを考えて話したり行動できたりするのではないかと思います。

そして私は、私の家族しかできない、「共通の話」をするのが好きです。それは、全員が学校で生活しているからこそ、共感できる話です。

例えば、

「私の学校の給食はこんなものが出るんだよ。」

「そうなの!?!いいなあー私の学校では絶対に出ない!。」

というかんじの、共通である給食についての話や、

「こういう子がいるんだけど、結構面白くてさー。」

「あ、分かる!そういう子いるよね!。」

というかんじの、共通の生徒、先生についての話です。

私は「共通の話」をしているとき、とても幸せです。それはお風呂に入るのを忘れてしまうほどです。

また、私は今年中学三年で、受験生です。私が行きたい高校など、進路に迷っているときは、お母さんとお父さんが親身になって受験、進路、

将来について話をしてくれたり相談にのってくれたりします。本当は自分で決めないといけないのに、助け船を出してくれるお母さんとお父さんには心からありがたく思っています。普段は言葉で言えないけど、毎日毎日感謝しています。

私と私の妹は、とにかく気が合わなく、私とは真反対の性格です。でも、

「これとこれどっちがいい?」

と聞かれると、妹と同じ答えをすることが何回もありました。偶然とは思えないほど何回もありました。私と妹はいつも意見がそろってほしいときにそろわなく、そろわないでほしいときにそろってしまいます。これが結構嫌なもので、他から見たら仲が良いように見えるのですが、実際私と妹は

「またー?もう嫌だよー。」とっています。でもこれについては、

「やっぱり血が繋がっているんだな。」と思い、少しホッコリとした気持ちになります。

私は私の家族が世界で一番幸せで最高だと言い張れる自信があります。お互いのことを考えたり親身になってくれたり仲良かったりの私の家族は世界一、いや、宇宙一です。

(寸評)

作者と妹、そして教師である両親は、毎朝、家を出て向かうのが「学校」という共通の場所。

お互いのことを考えて楽しく会話する家族共通の話題や時間に幸せを感じ、感謝し、とても誇りに思うことから「世界で一番幸せで最高な家族」と締めくくっている。家族の日常に温かさや絆を感じる作品です。



お母さんのまほう.....	神川小学校 三年	山岸 弘武
おばあちゃんありがとう.....	丸子北小学校 五年	關 琳
ぼくの家族.....	丸子北小学校 五年	小山 雅弘
家族の一言.....	神科小学校 六年	内山 輝凜
当たり前前大切な.....	第五中学校 一年	酒井 汐奈
私のお父さん.....	第六中学校 一年	荒木 紗耶
感謝の気持ち.....	第四中学校 二年	木下 悠潤
祖母について.....	第五中学校 二年	山本 玲花
あの日の事から.....	塩田中学校 二年	高橋 隆弘
じっちゃんの田んぼ.....	第五中学校 三年	伊東 吾郎
私の父.....	第五中学校 三年	田中 琴美

